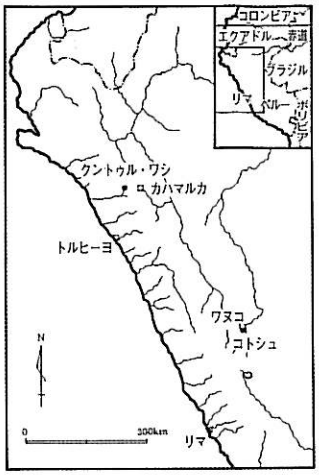
クントゥル・ワシ博物館

――日本アンデス調査団の奮闘記――

荒田　恵

クントゥル・ワシ博物館は、日本のアンデス調査団が1988年より2002年まで継続して発掘調査を行ってきた、クントゥル・ワシ遺跡のふもとに建っています。この遺跡はペルー共和国の北部山地の標高2,300mに位置する、紀元前1000年頃から50年頃まで続いた祭祀遺跡です。「クントゥル・ワシ」とはケチュア語で、「コンドルの館」を意味しています。首都リマからは車でおよそ12時間から13時間の距離で、カハマルカ県サン・パブロ郡クントゥル・ワシ村（旧ラ・コンガ村）に所在しています。



クントゥル・ワシ博物館は、国立のものでもなく、県立のものでもありません。遺跡より南米最古級の金製品が出土したことを機に、日本のアンデス調査団が中心となって建設した博物館です。建設当初から、その運営は、地域住民が組織する文化協会が主体となって行われ、時おり、日本人研究者がアドバイスを行うというスタイルをとっています。

さて、クントゥル・ワシ博物館建設のお話をする前に、日本のアンデス調査団が行ってきた調査について簡単にふれてみたいと思います。

あまり知られていないかもしれませんが、日本のアンデス調査は50年近い歴史があり、故泉靖一先生が1958年にペルー共和国にて遺跡の分布調査を行ったことに始まります。1960年には、ペルー北部山地のワヌコ盆地、標高約1,960mに位置するコトシュ遺跡の発掘調査で、アンデスに土器が出現する以前に建てられた立派な神殿を発見しました。この発見は、当時のアンデス先史学に大きな衝撃を与えるものでした。その後、コトシュ遺跡周辺の調査を行った後、さらに北のカハマルカ県へと調査地を移していきます。いずれの調査でも、祭祀遺跡（神殿）を対象としているのは、アンデスにおいて文明社会が形成される過程を解明する際に、祭祀遺跡（神殿）が重要な鍵を握っていると考えられたからです。これら一連の調査を通してアンデス調査団が得た見解とは、はじめに神殿があり、神殿を維持する行為（神殿更新）が、生産性を向上させ、政治、宗教、文化などを洗練させていったというものです。

国立民族学博物館の関雄二先生は、クントゥル・ワシ博物館建設にともない、アンデス山地の小さな村に電気が引かれ、インフラが整備されていく様は、アンデス調査団が出した文明形成過程に対する見解に符合しており興味深いとお話してくださったことがあります。

クントゥル・ワシ遺跡で金製品が発見されたのは、1989年の調査のときです。遺跡の頂上に設けられた大基壇の上には、中央に半地下式の方形広場があり、それを取り囲む三方には基壇が配置されていました。正面の基壇の内部を発掘したところ、一時期前の小さな基壇が隠れていました。この小基壇には竪穴の痕跡があり、それを深さ2メートル以上掘り進めると、粗い石積みの壁に当たりました。そして、その奥に墓室があることをつきとめたのです。墓に埋葬されていた人物の頭蓋骨のあたりからは、金製品が発見されました。それは、金の薄板に六角形の窓をあけ、そこに人物の顔を打ち出した金の小板を吊り下げた冠でした。その後、隣り合う似たような地下式墓室からも多数の金製品が発見されました。

2つ目の墓を掘り終わった段階で、村では保存委員会が立ち上げられ、調査団を交えた金製品の保管をめぐる集会が開かれました。1回の集会で問題が解決することはなく、時にはサン・パブロ市長を交えて集会が開かれ、金製品の保管について何度も話し合われました。その間、調査団は文化庁カハマルカ支所へ金製品発

見の連絡を行い、リマでは報道機関に発表する手筈が整えられました。

村人の総意は、村に博物館を建設して金製品を保管したいというものでしたが、結局その年は、安全面での問題もあり、サン・パブロの町役場に預けることに決まりました。

翌年、調査を再開するときになって、金製品が町ではなく、村に戻っているという文書をリマの文化庁で調査団は目にします。事の真相は、地方選の結果、サン・パブロの町長が落選し、新任の町長のいやがらせを避けるために、金製品を村人たちに戻したというものでした。以後、村人は密かに金製品を保管していたようでした。

この年も引き続き、金製品の保管をめぐって集会が開かれました。そしてその場で、調査団は、かねてから保存委員会の一部のメンバーに打診をして了解を得ていた案を、村の住人に提案したのです。その案とは、村に金製品を保管するための博物館を建設するために、いったん金製品を日本に持ち帰り、展覧会を開催してその資金を調達するというものでした。

役所あるいは政府に対する不信感が強い村の住民は、金製品が日本から戻ってきた折には、必ずクントゥル・ワシに返還することを調査団に約束させたうえで、全員が即座にこの提案を受け入れたのです。自分の国の政府や役所を信用しない村の住民が、“よそ者”である日本人研究者を信用したのです。その事実は、発掘調査を通して培われた、両者のあいだの強い信頼関係を物語っているといっても良いでしょう。

その年の調査終了後、サン・パブロ町や文化庁カハマルカ支所の政治的思惑に翻弄されながらも、調査団はなんとかクントゥル・ワシからの金製品の持ち出しに成功しました。そして10月には、リマのムセオ・デ・ラ・ナシオン（国民博物館）で最初のクントゥル・ワシ展覧会を開催したのです。日本では、1992年3月、読売新聞社後援による東京日本橋の三越百貨店での展覧会を皮切りに、熊本、愛知、宮崎、大阪、山梨、新潟、長野、石川、群馬、広島で展覧会が開催されました。

1993年に、調査団はクントゥル・ワシ遺跡の発掘調査を再開し、それと平行して博物館建設の準備を始めました。一方で、調査団は村の住民を集めて集会を開き、持ち出した発掘品の

クントゥル・ワシ博物館

展覧会を日本各地で開催して資金を集めつつあることを報告しました。そして、翌年には博物館の建設にとりかかり、村に博物館を委譲することを伝え、運営は、調査団がサポートをしながら、村の委員会に任せることになったのです。村の住民は調査団に賛同し、その年の9月に、運営主体として「クントゥル・ワシ文化協会」が設立されました。

文化協会のメンバーの一人から、博物館用地が寄贈され、翌1994年には博物館の建設が開始されました。そして、3年間にわたって日本に持ち出されていた出土品はクントゥル・ワシに返還され、日本大使館の「草の根無償援助」による展示設備の寄贈もあり、その年の10月15日に、無事、開館式が挙行されたのでした。

現在、「クントゥル・ワシ文化協会」会員から選出された博物館運営委員会を中心に博物館は運営されています。現在でも博物館の運営は順風満帆ではありません。調査団の先生方は、問題が生じるたび、文化協会のメンバーと話し合って解決法を探っていらっしゃいます。2004年より、クントゥル・ワシで出土品の整理作業に参加させてもらっている筆者は、そのような先生方の後ろ姿を傍らで拝見し、海外調査への取り組み方を学ばせて頂いています。

ペルーには私の興味を惹く遺跡がたくさんあります。同様に、調査地で起こる様々な問題に対して、一人の人間として真摯に向き合っていかれる先生方の“人間くささ”もまた、私を魅了してやまないのです。

【参考文献】

・大貫良夫　2000『アンデスの黄金　クントゥル・ワシの神殿発掘機』　中公新書
・加藤泰建・関雄二編　1999『文明の創造力　古代アンデスの神殿と社会』　角川書店